

ドキュメント 東日本大震災

水産総合研究センター 東北区水産研究所 宮古庁舎

東日本大震災が発生した2011年3月11日当日とその後のようすを、当時の宮古庁舎場長の青野と同主任研究員の藤浪が伝えます。



震災前の宮古庁舎(1995年撮影)

3月11日(金) 藤浪主任研究員記録

14時46分、地震発生。岩手県宮古市にある水産総合研究センター東北区水産研究所宮古庁舎(旧称宮古栽培漁業センター)には職員12人、共同研究中の学生2人がいた。青野場長(当時)と八谷研究員、藤瀬課長(当時)はサケの新たな放流方法の試験のため、岩田県山田町に、ほかにも魚市場に1人が外勤中、また2人が休暇中であった。

揺れは当初震度4程度のものであったが、徐々に強くなり、緊急地震速報が鳴り響いた。まさか!と思ったその時に一段と強い揺れに変わった。椅子に座っていられず机の下に逃げ込む。書棚が倒れ、書類が雪崩のように落ちてくる。揺れから1分程度で事務所前の地上10メートルの高架水槽の配管が断裂し、海水が噴き出す。しかもまだ揺れは収まらない。

安否確認と避難誘導をしなくてはと自分に言い聞かせて、場内放送をかける。

「業務連絡!まずは身の安全の確保、揺れが収まったら事務所前集合!」

通信が遮断される前に横浜にあ

る当センター本部と青野場長に連絡しなくては。まずは本部。呼び出し音が鳴るが誰も出ない。早く出てくれと祈ったところで電話が通じ、上ずった声を受話器の向こうから聞こえた。横浜も揺れているらしい。これはただごとではない。

この頃になってようやく揺れが収まり、職員らが事務所前に集合。誰にもけがはない。本部に状況を伝え、すぐに全員退避することを報告。と同時に停電となり、自家発電機が動き始める音が聞こえた。

とにかく何も持たず、高台へ避難することにした。青野場長と八谷研究員とは電話連絡がつながり、高台に避難中で無事とのこと。しかし藤瀬課長らとは携帯もつながらず。これ以上の連絡待機は無意味と判断し、宮古庁舎最大の資産である市場調査データが保存されているサーバーを抱えて自家車で避難開始。

高台にあるコンビニまで行くと、避難した職員の約半数が集まっていた。残りの職員の所在確認に車で出発。海が見渡せる職場近くの高台にいますと思って向かうも職員はいなかった。が、津波の第1波が向かってきたのを目撃する。波というより徐々に水位が上がってくるという

感じだった。水位はその後上昇し、砂浜と漁船を飲み込んだが、防潮堤の水門まで到達した後に、静かに引いていった。この時点でおそらく地震発生から20~30分が経過。宮城県や福島県、岩手県の南部では悲劇の第一幕が開けていた時間である。

津波が引いたためパソコンを取りに戻ろうと考え、高台から車を職場に向けて走らせようとしたが、本能的に車は職場とは逆方向の高台に向かった。今考えれば不思議だが、この時に職場に行っていたら、この数分後に押し寄せた第2波に飲み込まれていただろう。

コンビニの駐車場に戻ると、避難した全員が集まっていた。ワンセグのテレビニュースを見ていた職員から、宮古の市街地にも津波が押し寄せたことが報告された。また、職場方面から避難してきた人から、職場が全壊したことを知らされる。「栽培センターの方ですよ?センター、なくなりましたよ…。」

この時、職場がなくなるとはということか全く理解ができなかった。ショックよりも、地震直後に職場にいた全員が無事であったことを感謝した。帰宅方法をみんなで考え、山越えのルートで宮古市内まで出ら

れる可能性があることを確認。市街地に住んでいる者はこのルートで帰宅することとし、学生は筆者宅で待機することとした。

この夜は無情にも雪が降り、寒さと不安の中で一夜を明かした。ひっきりなしに続く余震におびえながら聞いていたラジオが伝える悲惨な状況報告は、想像をはるかに超えるものであった。そして、強く思った。地震の直後に全員で避難したことが正しい判断であったこと、津波の第1波が引いたのを見て職場に戻ろうとした自分の判断がいかに愚かなことであったかを。

3月12日(土) 青野場長記録

11日は高台で待機した後、内陸を回って夕方に宮古に戻った。既に暗くなり始めていたが、あちこちに水があふれた跡が見られた。地震による水道管の破裂と思っていたが、自宅に戻ると部屋一面にヘドロがたまっており、足を踏み入れると夜光虫が光った。この時やと津波が市街地まで来ていたことを知った。

停電と断水の中の寒い一夜が明けた。晴天。しかし市街地では全ての信号機が停止し、道路には津波が運んだヘドロがたまり、倒壊した家や流された自動車、そして船までもが道を寸断していた(写真A)。市街地に住んでいる職員は早朝から動き始



め、連絡が取れていない者の家を訪ねて回った。時折起こる余震と津波再来情報が交錯する中での移動は緊張の連続であったが、全職員が無事であることが確認できた。また、携帯電話による本部との連絡もできるようになった。

しかし職場がどうなったのかがまだ分からない。昨日は藤浪主任研究員から「流された」、「なくなった」と聞いたが、早くこの目で状況を把握する必要がある。しかし、道路は寸断されていて交通手段がない。そのため、翌日、職員数人で約10キロ先の職場まで歩いて行ってみることにする。

3月13日(日) 青野場長記録

朝8時に集合し、徒歩で職場を目指す。倒壊した家屋や電柱などで歩道を歩くことはできず、ヘドロでぬかるむ車道を進む。2時間ほど歩き、国道45号から右に下り、職場から200~300メートルほどの所に来ると、あたりは異常なようすに変わっていた。道のガードレールはなくなり、電柱は倒れ、重くて開け閉めが大変だった職場の門戸がそこにあった。さらに進むと、変わり果てた職場の建物や海が見えてきた。しかし、これらはその位置からは本来見えないはずのものである。職場のまわりにあった家、林、そして防潮堤までがなくなってしまったため、職場の残骸とその向こうの海までもが見通せたのだった。

職場は消えずに残っていた。しかし無残な姿をさらしていた(写真B)。古い建物の鉄骨は根元から曲り、崩れていた。比較的新しい研究棟はか



ろうじて形が分かる状態だが、壁はなくなり、鉛のように曲がった鉄骨だけになっていた。高さ数メートルの防潮堤は中央部から決壊したようだった(写真C)。防潮堤上部にある水門の開閉モーターにはがれきがかみついていて、津波の水位はそれ以上に達したようだ。

これまでの研究記録など、少しは回収できるかと考えていたが、建物内にもがれきが積み重なり危険な状態であったため、この日は状況確認に止めて引き返した。



3月14日以降、勤務先を失った私たちは、しばしば職員のアパートに集まり、情報交換を行い今後のことを話し合った。これからの調査研究、復興活動に関する議論も重要であったが、まずは当面の「職場」を見つけることが最優先であった。幸いにも3月23日には宮古駅近くのビルの一室を借りるめどが付いた。そして、4月1日に本部から理事を迎えて東北区水産研究所宮古庁舎仮事務所としての開所式を行い、私たちも復興への一歩を踏み出した。